

格子欠陥に参ずる -負の情緒-

日本画家

石田 翔太

Visited Lattice Defects

- Negative Emotion-

Artist

Shota ISHIDA

日本の「科学」を考える時に明治の近代化を無視するわけにはいかない。西洋文化をいかに理解し導入するのか、そしてこれまでとこれからの日本文化をどのように考えていくのか、先人の苦勞は想像に難くない。「科学」という言葉の初出は 1874 年の西周による論説「知説」の中だと言われている。哲学者としての一面も持つ西は実理，窮理，理学と変遷してきた日本式の学問を踏まえた上で西洋科学の精神的理解に努めた。また，「日本画」という概念も 1882 年という近い時期にアーネスト・フェロノサによって西洋画と対比した形で唱えられた。画家たちもまた流入する西洋美術に葛藤することとなる。明治時代は科学と日本画における共通のターニングポイントなのである。

時は流れ現代，哲学者アーサー・ダンターは芸術史を再現期，表現期，哲学期の 3 つのモデルで語った。芸術は「どのように再現するか，何を表現するか」から「いかに考えるか」に移行しつつある。哲学という仲介者の下，科学と芸術は再び接近しているように思う。

「欠陥」は日本の芸術にとって親しみのある概念である。水墨画や俳句に見られるように「欠く」や「無い」ことの扱いは感性の見せ所である。僭越ながら日本画家の立場から格子欠陥から考え，感じることをお話する。



図 1:「壺ノ夢」2020 年 和紙で凹面の張り子を作成し，顔料等で描いた。黒色部分は肉眼による認識が難しくなっている。